

---

# 青いチョッキ

れんじょう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青いチヨッキ

### 【Nコード】

N9355Z

### 【作者名】

れんじょう

### 【あらすじ】

おじいちゃんの青いチヨッキを僕は受け継いで学校に行く。おじいちゃんは学校は面白いところだといっていたけれど、僕はそんな風には思えないよ。教室にいる他の三羽のうさぎたちもちっとも楽しそうじゃない。だけど双子のうさぎが僕にへんなちょっかいをだすんだ。

睦月は年の始まり、力強い赤の色

如月は高貴な紫紺色

弥生は冬の厳しさからほっこり枝に育つ桃の色

卯月はすべてを覆い尽くす桜色

皐月は芽生えたばかりの若葉の色

水無月はしとしと降りだす雨の水色

文月は日の高さを感じ始める空の青色

葉月は色濃く命を燃やす緑色

長月は菊の美しい黄色

神無月は山を彩る海老茶色

霜月は土の下に育つ霜柱の氷の白色

師走は夜の夜長の黒い色

学校に通うすべてのうさぎは、自分の誕生月の色のチョッキを着ている。

真新しい青いチョッキを着たうさぎ達の中で、ちよっとくたびれて使い込まれた感がぬぐえない、一目見てお下がりだってわかる青いチョッキを僕は着ている。

僕の名は、セイ。

文月生まれのお六ヶ月。やっと学校に入学できる月になった。

さすが入学式なだけあって、他の三羽のうさぎ達はみんなぱりっとした真新しくて色の濃い青のチョッキを着ているけれど、僕のチ

ヨツキはおじいちゃんのお下がりだ。

お下がりだといって馬鹿にしてはいけないよ。

おじいちゃんは学校始まって以来、素晴らしい成績を収めて卒業した優秀なうさぎだったんだから。

そのおじいちゃんと同じ月に生まれた僕はなんて幸運なんだろうって思ったよ。

周りのみんなが僕をちらちらと意味深げに見ているけれど、そんなことは僕の知ったこっちゃあない。

確かにみんなのようにお父さんやお母さんが逃えてくれた真新しいチヨツキにあこがれる気持ちが無かったとは言わないけれど、けれど僕はおじいちゃんが着ていたチヨツキを着れることを誇りに思っているんだ。

僕にはみんなみたいにお父さんもお母さんもいない。

ちよつとした不注意で、人間に見つかってしまったからね。

人間に見つかってしまったら、それはもう二度と会うこともできない遠くへと連れ去られていくんだ。

それは僕がまだ赤ちゃんだったころだから、僕はお父さんの顔もお母さんの顔も覚えてはいない。

でもおじいちゃんが幼かった僕を見つけてくれて、僕を温かく包んでくれた。だから僕はさびしくなんてないんだよ。

おじいちゃんがいるから、僕は僕でいられるんだ。

僕の青いチヨツキには、おじいちゃんの愛が織り込まれている。

学校っていうのは、もつと楽しいものだと思っていた。

おじいちゃんが寝る前に語ってくれる学校の話に、僕はいつもわくわくどきどきして眠れなくなるほどだった。だから学校っていうところは勉強を教えてくれるだけじゃなくって友達も沢山できて探

検も冒険もなんでもできるところだって思っていた。

ところがそれは違ってた。

僕と同じ誕生日のうさぎは僕を入れて四羽いた。僕はみんなと友達になりたかったけれど、みんなはそうじゃなかったようだ。

僕が話しかけようとすると、みんなが僕を避けるんだ。

本当はそうじゃないのかもしれないけれど、でも僕はそう感じてしまっただ。

……なんでだろう？

「きつたねえなあ！」

「本当だ。セイはいつも汚れてるね」

家に帰るまでにある川のほとりで佇んでいると、土手の上から同級生のランディとムステイ（この二羽は双子の兄弟だ）が僕を見つけて指を指しながら大声で笑っている。

僕にはなんでそんなことをされるのかがまったくもってわからない。

だから僕はいつも無視をすることになっているんだ。

それが彼らには面白くないらしい。

土手をびよんぴよんと下りてきて、僕の周りで匆ね回って囃したて出した。

「セイは汚い」

「セイはみなしご」

「セイは古ぼけ」

「セイは臭い」

何度も何度も同じ言葉を、僕に向かってぶつけてくる。

ランディとムステイは先生がいなるときに僕を見つけるといつつもこつやって僕を馬鹿にする。

いったい何が面白いんだろう。

僕を馬鹿にすることがどうしてそんなに面白いんだろう。

僕の周りをぐるぐる回って、けれども言葉を投げつけるときは必ず僕の真正面にきたときで。

違っつて判っつていても、僕はその投げつけられた言葉に傷つくんだ。

「セイは汚い」

「セイはみなしご」

「セイは古ぼけ」

「セイは臭い」

僕は汚くなんてない。

だつて『身だしなみは大切だ』とおじいちゃんがいつもいつてるから、毛づくろいはちゃんとしてる。

僕はたしかにみなしごだけど。

だけとおじいちゃんという大切な人がいるんだから、その言葉で僕は傷つかない。

僕は古ぼけなんかじゃない。

みんなと同じ月生まれなのに、どうして古ぼけなんていわれるのか、僕は理解ができないよ。

僕は臭くなんてない。

そりゃあうさぎだからお風呂になんて入らないけど、でもそれはみんなだつて同じだろう？

だから僕は彼らの言葉になんて傷つかない。

そのはずなのに。

いつしか僕はほろりと涙を流していた。

「セイが泣いてる」

「本当だから泣くんたる」

うるさいうるさいうるさいうるさい

僕の周りを馬鹿みたいに回り続ける双子のランディとムステイが、勝ったとばかりに笑いだす。

そして僕の大切な青いチョッキに手をかけて無理やり脱がそうとし始めた。

「汚いチョッキ」

「ぼろいチョッキ」

「臭いチョッキ」

「セイのチョッキ」

歌うように僕の大切なおじいちゃんのチョッキを馬鹿にしながら、ランディが僕を抑え込んでムステイが力を込めてチョッキを無理やりに脱がした。

びりびりと古い布が裂けて行く音が聞こえた。

僕の大切な青いチョッキがひどく小さくなっていった。

「駄目だろ、破いたら」

「だってぼろいから破けたんだよ。わざとじゃないよ」

双子はちよつとだけばつが悪そうに、だけど僕の顔をみたたんになやりと笑いながらただの布切れとなったおじいちゃんの青いチョッキをこれ見よがしにくるくると振り回した。

あんまりくるくる回すもんだから、勢いがついて手からぽーんと離れてしまって、そのまま川の中ほどのほとりと落ちた。

わざとそうやったに違いない。

だって絶対そうなんだ。

僕の周りでケタケタと、笑い踊り狂っているのがその証拠。

僕は二人が通り過ぎるそのすきについて、川の中で水を少しずつ含んで青くなつた僕のチョッキの布切れを取り戻そうと駆けだした。

川の水が、僕の足に絡みつく。

まるで氷でできた手が足首をがっしり掴んだようだった。

けれど僕はそんなことはちっとも気にならない。

早くしないと真っ青になつたチョッキは重たい水を含んでその川底に沈んでしまう。

水際で双子が何か叫んでいるけど、何を言っているのかさっぱりわからない。

僕の大切なチョッキは、目の前でどんどんどんどん水を含んで真っ青に染まっていった。

だめだ。

おじいちゃんのチョッキが。

水に沈んで見えなくなる。

あともう少し、あともう少しで手に届く。

ざばざば氷のような水をかき分けて乱暴に進んでいくから、僕は頭から全部ずぶぬれになっていた。

あともう少し、あともう少し。

凍える手を伸ばして伸ばして。

とうとう僕は、大切なおじいちゃんのチョッキを掴むことができた。

川岸を見ると、そこにはランディもムステイも見当たらない。

僕は正直ほつとして（だって岸に帰ったとたん、彼らの嫌みにさらされるのだけは勘弁だ）、言うことのきかなくなつた足を前に一歩進ませた。

指も凍えていうことをきかなくなつたので、おじいちゃんのチョッキは腕の中でぎゅっとして包みこんで持っている。

さあ、あとちょっとで川岸だ。



僕は最後の力を振り絞って、なんとか川岸にたどり着いた。

そうして僕の意識はなくなった

……あつたかい。

ふと気づくと、なにやら体がゆさゆさと揺れていて、あつたかい  
何かにぼくはたゆたっているようだった。

「気が付いたかい？」

あつたかい何か僕に声をかけてくる。

青色の海の中を波打つように振るえる声で。

その声は、同級生のうちの一羽であるシユリの声だった。

「……シユリ。僕は……」

「君も随分と馬鹿だねえ」

「！馬鹿って、いきなりなんてことを言っんだい」

ひどい言葉を投げつけられて、僕は丸まっていた体を起こそうと  
したんだけど、僕はシユリにおぶられていたようで、シユリは歩  
みを止めたんだ。

「危ないから動かないでくれ。それに君は今動けないと思うしね」

「……僕はいつたい……？」

たしかにシュリの言うとおりだった。

シュリの背中からあわてておりようにも、僕の手や足はまるで僕とは違うモノのように僕のいうとおりには動いてはくれなかった。

「君は本当に馬鹿だった。うさぎのくせに十二月の川に入るだなんてやってはいけないことをして。僕たちうさぎに水は大敵なのは赤子でも知っていることなのに。そのうえこの冷え込みじゃあ、水はまるで氷でできた針になる。君はなんて無茶をしたんだい」

大きくため息をつきながら、それでもゆっくりと前に進みながら、シュリは僕に話しかけてくる。

学校ではあまり話したことがないのに、どうして僕はシュリにおぶられているのだろう。

「だって、僕のチョッキが川に落ちたんだよ。大切なチョッキなんだ。だから僕はチョッキを拾おうって思ったただけだったんだよ」

「そうだ。君はそのチョッキをとっても大切に扱っている。動かない腕の中に閉じ込めるように今も持っているだろう？僕はその冷たくなったチョッキを君から離そうと努力をしたんだけど、君は決して離しはしなかった。そのチョッキが君にとってどれほどの価値があるのかなんて、一目瞭然というものだ」

仕方がないというようにまた大きく息を吐いて、シュリは歩きだした。

シュリの声はシュリの身体を伝えて僕の身体に直接響いてくる。

あつたかいのはシュリの体温とそのやさしい音のせいだ。

シュリが何か話しかけてくれているとはわかつているのだけれど、僕はなんだかふわふわといい気分になって、だんだんと目が開けられなくなっていくた。

「シュリ……ありがとう」

その言葉を最後に、僕はまた意識を手放した。

それからのことは僕はおじいちゃんから話を聞いたにすぎない。

あの後、シュリは僕の家まで急いで歩いて、おじいちゃんに僕がどうして川に入ったかを話してくれた。

実はシュリは川の橋の上から、ランディとムステイが僕を押さえつけてチョッキを川の中央に飛ばすのを見たんだそうさ。

僕はあの時夢中になってチョッキを追いかけてしまったので、ランディとムステイに橋の上から叱っているシュリにはまったく気が付かなかった。ランディたちは怖くなって逃げ出したんだそうさ。そしてシュリは橋から川岸にやってきて僕が戻ってくるのを待っていたんだって。

川岸で倒れた僕を、シュリはつけていたマフラーをとって僕に覆わせてからおぶって、急いで僕の家に向かっている最中に僕は少しだけ意識を取り戻して僕と話したって聞いていた。

おじいちゃんの家に着いたらさあたいへん。

おじいちゃんは僕の様子にひどく驚いて、シュリに何度もお礼をいって、とっておきのにんじんを感謝のしるしに渡した。それでも足りないくらいだとおじいちゃんは後から僕に言っていた。

おじいちゃんは僕に掛かりきりになって一晩中看病をしてくれた。僕は温かいタオルに包まれて、手足をゆっくりと温めて感覚を取り戻していった。

シュリは

シュリは僕を家に帰したあと、なんとランディとムステイの家に

行った。

そしてランディとムステイの両親に二人が河原で何をしたかを見た限り一部始終話した。

もちろん二人の両親は初めのうちはそんなことをちっとも信じてはいなかったけれど、シユリがおじいちゃんから預かった僕の大切な青いチョッキを二人の前に出すと、二人は観念して僕にしたことを認めた。

ランディたちの両親は僕の家までやってきて、おじいちゃんに謝った。

けれどもおじいちゃんは「謝るべきはあなた方ではなく、ことを起こしたランディとムステイであって、謝る先も私ではなく、私の孫のセイに対して謝りなさい」と一喝したそうだ。

おじいちゃんのこととは至極もつともなので、ランディの両親はまずは子供の責任は親にもあるということ自分で自分たちも謝りたいということと、もちろんランディたちには僕の意識が戻ったらきちっと僕に謝らすことを約束して帰って行った。

おじいちゃんはシユリを褒め称えた。

僕と同じ月の子なのに、なんてしつかりしているんだ、と。

おじいちゃんが子供を褒めるなんてめったにないことだったので、僕はちよびつとだけシユリが羨ましかった。

けれどそれ以上に、シユリに感謝をしていた。

学校に登校できるようになったら、いの一番にシユリに「ありがとう」「って言おう。」

僕は今、真新しい青いチョッキを身につけている。

おじいちゃんのチョッキは破れてしまって使い物にならなくなってしまうから。

けれどもそのチョッキの裏生地には、おじいちゃんの薄青いチョッキの布地がパッチワークされて使われている。

大切な大切なおじいちゃんのチョッキ。

真新しいチョッキはランディとムステイが学校で出会ったときにおずおずと渡してくれた。

これで勘弁してもらえとは思ってはないうつていたけれど、僕はもうあのことは怒ってないよと笑っていった。

だって、あの事があったから僕はかけがえのないものを得られたんだ。

「おはよう、シユリ！」

僕が元気にあいさつをすれば、シユリは教科書を見ていた顔を上げて、仕方がないと笑いながら「おはよう」と返してくれる。

僕は学校がだんぜん楽しくなってきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9355z/>

---

青いチョッキ

2011年12月29日10時01分発行